

里地里山保全活動コンテスト

県内から2団体受賞

人々の暮らしと密接なかかわりを持つふる里と山の保全に尽力している団体を表彰する「里地里山保全活動コンテスト30」(読売新聞社主催、環境省共催)の三十団体に、県内関係では、NPO法人「新里昆虫研究会」(新里村)と、水上町で活動する「森林塾青水」(本部・東京都新宿区)の二団体が選ばれた。表彰式は十二日に読売新聞東京本社で行われる。

広葉樹植え昆虫王国作り

— NPO法人「新里昆虫研究会」

緑豊かな赤城山のふもと。一九九〇年に発足したで蜚の生息地を守ろうと「ホタルの会」が発展し、



昆虫王国を整備する新里昆虫研究会のメンバーたち

一九九一年十一月に任意団体として発足。地域ごとの学問を奨励する県の「一郷一学」運動をきっかけに、昆虫をテーマに掲げ、昨年八月、NPO法人に移行した。会員は約六百人を数える。

「昔から里山は人が手を入れ、利用して(自然と)共生してきたというのが、小池文司会長の持論。昆虫の調査・研究活動のほか、山林や湿地からなる村内の約三万平方メートルを使った「昆虫王国」作り、河川の清掃活動などに取り組んでいる。

昆虫王国では、雑木が多かった山を整備し、クヌギやナラなどの広葉樹を植

え、小動物や昆虫が暮らしやすい地域作りを目指す。昨年から下草刈り、水辺や棚田の整備を始めた。地元

の保育園児や小中学生が参

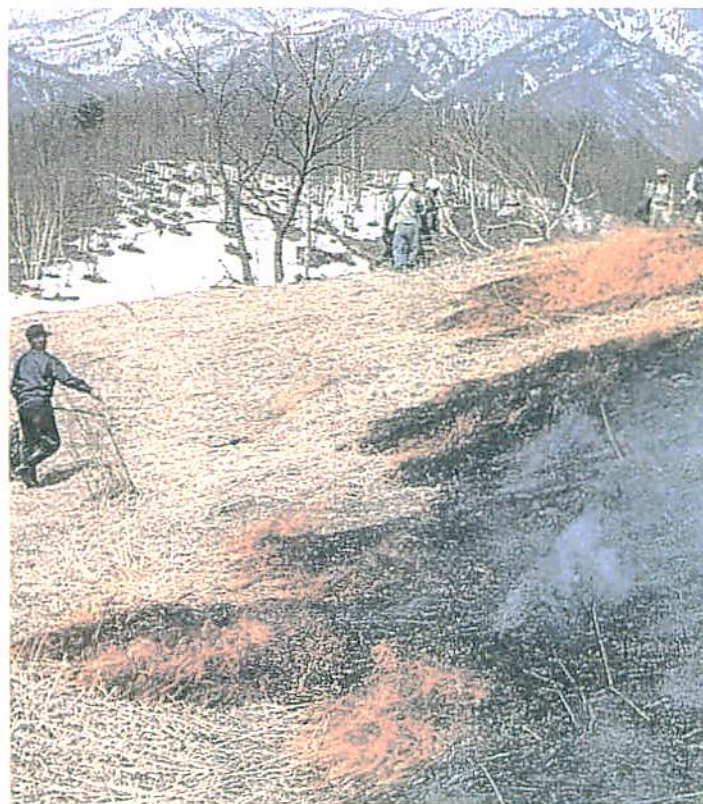
加することも多く、自然や昆虫との触れ合いの場になっている。小池会長は「思いがけない賞をいただいたり驚いている。今後、こうした活動が地球規模に広がり、環境の分野に誰もが目を向けるようになれば」と話している。

かや場再生へ野焼きも

— 森林塾青水

二〇〇〇年九月に設立され、首都圏を中心に会員は約七十人。水上町藤原上ノ原の町有林二十一を借り上げ、地元住民の手も借りて昨年、かや場の再生に取り組んでいる。

一帯はワラビなどの山菜



40年ぶりの野焼きを行う森林塾青水の会員たち

が自生する自然豊かな里山で、かつては、かやぶき屋のふき替え用のかや場として使われていた。会員たちは、林業の衰えとともに荒廃したかや場を復活させようと、草を刈ったりゴミを拾ったりし、今年四月に

中で知ったこのような知恵も学ぶ。昨年八月には、千葉県から環境学習に訪れた中学生約百二十人が、会員たちの指導でフィールドワークなどを行った。表彰について清水英毅塾長(62)は「取り組みが評価されてうれしいが、かや場再生は時間がかかる。今は「始まりに過ぎない」と気を引き締めている。